

## 第2回乳幼児期の教育・保育のあり方検討委員会

日時：令和3年1月26日（火）午後6時30分～午後8時

場所：区役所第1庁舎5階 庁議室

### 〈次 第〉

- 1 挨拶
- 2 「(仮称)スタンダードカリキュラム」(骨子イメージ)等について (資料 1)
- 3 無藤 隆 委員  
「乳幼児の保育・幼児教育として大切にしたいこと」
  - ・乳幼児期の発達の捉え方:近年の発達研究に基づく (資料 2-1)
  - ・新しい時代における保育者の資質向上の方策を考える (資料 2-2)
- 4 大久保 千寿 委員、坂田 朗 委員、柄木田 えみ 委員  
乳幼児期の教育・保育の現場における幼稚園教育要領等の改訂・改定などを踏まえた教育・保育の実践について
- 5 意見交換
- 6 その他

#### 【配付資料】

- ・【資料1】 「(仮称)スタンダードカリキュラム」(骨子イメージ)等について
- ・【資料2-1】 「乳幼児期の発達の捉え方:近年の発達研究に基づく」
- ・【資料2-2】 「新しい時代における資質向上の方策を考える」

# 乳幼児期の発達の捉え方： 近年の発達研究に基づく

無藤 隆（白梅学園大学）

# 1. 乳幼児発達の概要

- 親子関係の愛着から安定した関係が育ち、そこから外への探索が生まれる。
- 遺伝的影響や胎内環境の影響は強い。
- 気質その他の個人差の違いは大きい。
- 子どもによる発達の筋道の独自性は従来の想定以上に大きい、ある範囲に留まる。
- 認知面として、一般的な知能の発達とともに、特定の内容領域ごとの発達の傾向は生得的ないしごく小さい時期から見られる。
- 0歳・1歳くらいは主に直感的身体的な基盤が働く。2歳ないし3歳くらいから表象機能が発達し、一段上のより自覚された発達へと移る。
- 非認知面として特に感情のコントロールと思考のコントロール（とりわけ実行機能）が重要であり、その顕著な発達が4歳から6歳に見られる。
- 幼児期は文化社会との関わりが大きくなり、そこから様々なことへの好奇心と学びが生まれる。回りの物事と共に大人や年長時の振る舞い・言葉・対話から学ぶ。
- 小学校以降、より集中的で自覚的で効率的な学びへと向かう。思春期の混乱を経て、成人期の成熟へと向かう。

## 2. 乳幼児の学びの特徴（1）

- 人間の子どもは学習する能力、特に他人から学ぶ能力がそなわっていて、大人は子どもを世話しながら教えられるようにできている。人間がうまく進化してきた要因はそのような事実にある。
- 人間の子ども時代の長さは、特に脳の大きさ、知性の高さ、柔軟性、学習能力と相関している。大人は子どもの世話を極めて大きな時間とエネルギーをつぎ込む。子ども時代は学ぶための時間だ。子どもは学ぶようにできている。
- そこでは、幅の広い学習と文化の伝達の進化が重要となる。学習と文化の伝達が重要なのは、そこにフィードバック・ループが生じるからだ。学習したり教えたりする能力のわずかな変化によって、行動や思考が大きく変わる可能性がある。適切な条件下では、それらの変化からさらに重要な変化が起こる可能性がある。
- 人類の過ごしてきた環境は変わりやすい。変わりやすさには変わりやすさで対応するのがよい。多くの人の子どもの世話をすれば、子どもはさまざまな情報とお手本に接することができる。それぞれの子どもの気質、能力、発達過程の違いにより、さらに複雑さと不確定さが増す。よい乱雑さであり、そのおかげで人間は常に変化を続ける環境の中で、力強く生きることができるのだ。
- 人間の子育てには三つの関係がある。第一がつがい（夫婦）の関係。夫婦は互いにそしてその子どもを愛する。第二に祖母と孫の関係。第三にアロペアレンティング（仮親）の関係。人間は他人の子どもの世話もする。

# 乳幼児期の学びの特徴（2）

- 幼い子どもが他人から学ぶことは多い。赤ん坊は特に世話をしてくれる人の元で安心して過ごし、そこからの情報を敏感に察知している。人々が何をして、なぜするのかを、自分から進んで考え理解しようとしている。その情報を自分の経験で得た情報と高度な方法で組み合わせる。子どもたちは世界の仕組み、そして周囲の人々の心理と社会的な関係を理解していく。
- 子どもたちは周囲の人々を見て、それを真似て学ぶ（観察学習）。また他の人が世界の仕組みについて話していることを聞いて学ぶ（証言からの学習）。
- 模倣は機械的に同じことをするのではない。物体の仕組みを知る。人がなぜその動きをするかを知る（意図・目標・目的の学習）。
- 原因と結果について学ぶ方法は、試行錯誤、そして他の人や出来事を観察することによる。
- 学習を大きく「利用」としての学習と「探索」としての学習に分けられる。利用では効率を求める。探索ではすぐに効果はなくても、多くの可能性を試そうとする。後者は特に幼児期において中心となる。

# 乳幼児の学びの特徴（3）

- 幼い子供は他人の発言から多くを学ぶ。自分がよく知っている人、たとえば親や園の先生の言葉を信じる。自信のある話し方をする人から、また博識の人から学ぶ。
- 物語のような想像の世界を本当のこととごっちゃにはしない。反事実の世界として理解するが、心情的影響は受ける。
- 子供は質問をすることから学ぶ。つまり、知りたい情報を要求する。「なぜ」という質問で因果関係を知らうとする。
- 子どもは親密で自由に生き生きとした会話に参加することで学ぶ。さらに、多様なスキルと持つ多くの違った人を観察・模倣することによって学ぶ。多くの違う人々が、多くの違うことについて、多くの違う方法で話すのを聞いて学ぶ。
- 遊びは多くのことを柔軟に違うやり方で行えるようになることを助ける。
- 遊びは仮定のあるいは事実とは違うことを考える能力、別の世界の可能性を考える能力と深くかかわっている。
- 幅広く調べ、でたらめに行動し、ばかげたことを試し、理由がなくても何かをする。そのためには、結果は関係なく、調べること自体が楽しいものでなくてはならない。
- ガイド（導き）付きの遊びは教師・保育者のモデルになる。「足場かけ」である。

# 乳幼児期の学びの特徴（４）

- 子どもは発見学習のあとに完全習得学習の仕方を身に付ける。これら二つの種類の学習の基本的なメカニズムは異なっていて、かかわる脳の部位までも異なっている。完全習得学習には一種の管理された目標が求められるが、それは幼児にはできない。学齢期の子どもははるかに効率的で有能だが、融通が利かない。
- 人為的につくられたスキルを身に着けるために、子供の自然な学習能力（幼児期の）をどう高めるか。例えば、幼い子にみられる直感的な数字の理解と、測定可能な数学的計算スキルの間には連続性がある。
- 学齢前の子の注意の幅広さは、柔軟な学習を可能にするが、学齢期になって注意力をコントロールして集中させることで、何かを素早く行うことができるようになる。

# 3. 幼児期における仲間集団の役割

- 人間の社会性・協同性は3つの関係から育つ。
- 第一は個人の意図性の成り立つ段階。利他性が成り立つ（相手を助けることが自分の得になることを越える）。個人としての自己制御が働く。
- 第二は協同の意図性の段階。一対一の相手の見方・意図を考慮する。第二人称的道德性が成り立つ。共同的志向が働く。公正を考慮する。社会的な自己制御が働く。
- 第三は集団的意図性の段階。集団の持つ集団的規範を考慮する。文脈化が影響する。集団を志向する道德性が成り立つ。規範的自己制御が働く。
- 以上のプロセスは乳児から始まり（第一段階）、乳児後期（9ヶ月くらい）から幼児前半（第二段階）から幼児期後半（3歳くらい）から第三段階）に至って、社会人としての基本的な準備がなされる。



# 4. 自分をコントロールする力の発達

- 非認知スキルとは（OECD）。他者とうまくつきあう能力、自分の感情を管理する能力、目標を達成する能力。
- 幼児期の研究から、特に目標を達成する能力、特に実行機能が重要。実行機能とは、目標を達成するために、自分の行いを抑えたり、切り替えたりする能力のことである。
- 実行機能には、感情の実行機能と思考の実行機能がある。
- 感情の実行機能とは本能的な欲求や感情をコントロールして目標を達成する力。幼児期の終わりに向けて欲求を抑える力が発達する。さらに欲求を抑えるための工夫が5・6歳になるとできるようになる。（その後も成長が続く。）
- 思考の実行機能はついついやってしまいう行動、習慣、癖などをコントロールする力。基本要素として、その状況で必要とされる目標を保ち続ける。いくつかの選択肢から一つの行動を優先する（特に選択されにくい行動を優先する）。行動や活動を切り替える。5・6歳になると前もって切り替えの準備ができるようになる。
- 実行機能の発達には遺伝と環境が関わるが、子ども時代は環境要因が特に重要。胎内環境、支援的子育て、家庭の温かい雰囲気、睡眠等が関連する。

# 新しい時代における保育者の 資質向上の方策を考える

無藤 隆（白梅学園大学）

# 1. 幼児教育（保育）における教育の働きの一層の重視という動き

- 幼児教育（幼稚園・保育所・認定こども園）の質を向上させていくことが大きな課題となってきた。それは従来から言われているとおりであるが、それに加えて新たな事情が生まれてきていると思われる。幼児教育における「教育」の質がさらに問われる時代となりつつあるのではないか。
  - 1) 待機児童問題が今なお一部の地域では厳しい状態にあるにしても次第に解消に向かうことが見えてきた。量的拡充が終わりに向かうと、いよいよその質が問われるだろう。どこを残すのか、どこに向けて統合していくのかが課題となるからである。多くの園もどういうことを「教育」としてイメージするかはともかく、それを大事にしているということを園の広報上、前面に出すことが増えてきている。
  - 2) 幼児教育施設に乳幼児の教育の相当部分を委託する動きが拡大していくであろうからである。それは家庭にいただけでは子どもを育てるのが大変だという親・保護者の思いが最近の事態の中で広がったと思われることにある。それはさらに、例えば、他の子どもと遊ぶ、外遊びをする、子どもにどういう定義であれ教育的経験を与える、ということにおいて多くの親は家庭で出来ることに限界を感じざるを得ないということがあったのではないだろうか。多くの家庭ではテレビ・ネット・ゲームに頼ることが増えていくことも多くの親は仕方ないと思いつつも、それだけでは困るとも思っているだろうからである。

3) 乳幼児期の教育がその後の子どもの学校さらに人生において重要なのだという知見が広く知れ渡ってきたことにある。明らかにネットで手に入る多くの子育て情報はそういうことを知らしめてきている。いかに「優れた」園を選ぶかは親の大きな仕事となってきたのである。問題は何が「優れた」ものなのかの専門知・実践知に裏付けられ、保護者や行政担当者等の納得の得られるモデルの構築とそのコミュニケーションである。

4) それに応えるべく、多くの園そしてそこで働く保育者はその期待に見合うだけの素養とスキルを身に付けているのだろうか。そこはあまり楽観はできないだろう。だが、その質を上げていくことにおけるいくつかの方向は既に実現へと向かいつつある。それは何より保育の見直しの機会の拡充であり、研修の充実である。それを保育者の働き方改革とどう両立させて実現するかが今問われている。

## 2. 保育の質の向上としての具体策いくつか

### 1) 研修の質の改善

- 研修の拡充。特に集合研修とリモートによる研修の組み合わせのあり方を探る。
- 全員が参加できる体制を創る。
- 往還型の研修。研修で学ぶことを日常の保育活動で活用し、それを元に再び研修で学ぶ。
- ワークショップ型の研修。ワークショップと知識を得る研修などの組み合わせを進める。

## 2) 園のマネジメントの充実

- 園としてのマネジメントを確立し、保育の園としての統一性ととともに各職員の創意の可能性を広げる。安全と保育の充実を両立させていく。
- チームとしての保育を広げる。保育者同士・職員同士の情報の共有や話し合いを確保する。
- リーダーシップの分散的推進を進める。管理職はもとより担任等についても一定のリーダーシップを担い、協同作業を行っていく。
- 保護者との関係を広げ、情報共有を可能とし、信頼関係を確保する。
- 外部の研修への参加を広げる。公開保育などを導入する。園の自己評価を進め、改善の活かす。
- 何より働き方改革を保育の質の向上策との両立を図る形で進める。

### 3) 園内研修や保育ドキュメンテーションの活用

- 事務作業と共に保育の記録や共有や討議を可能にする「ノンコンタクトタイム」をわずかでも確保する。
- 保育の記録を取り、保育者・職員間で共有し、話し合い、保育の改善につなげる。
- 記録は簡便で誰でも出来るやり方を導入する。
- 記録を保護者・子どもたちとも共有を図る。

## 2. 保育の改善の主な技法の1つとしての写真によるドキュメンテーション

### 1) 何に注目するか

- 子どもの関わりのあるあり方を探る。そのため、何をしているか、何に視点を向けているかが分かるようにする。
- 写真は気楽に撮って、その現場を分かっている保育者が意味づける。
- 何に注目するかはその時々保育者の関心でよい。
- その時には意味がよく分からないが、子どものしていることが面白いとか驚くということをつかえることも大切だ。
- 保育者が保育の場での自分のセンス（感覚・感性）への自信を持てるようにしていく。
- 次第に子どもの活動を仔細に捉え、その意味の深まりを感じ取り、言葉にすることが可能になっていく。



## 2) 保育者同士で共有する

- それぞれの保育者の独自の読み取りを大事にする。
- 正答を求めるより、多面的な理解を深めていく。
- その理解を元に、次の保育の手立てをいくつも構想していく。
- そのための時間としてノンコンタクトタイムを短くてよいので日々設定できるようにしていく。
- 時々、長時間を確保して、子どもの活動の可能性を一人一人の子どもに即して広げていく。
- 子どもへの力の育ちの長期的な見通しへとつなげる。
- 保育の手立てとしてその拡がりを理解していく。直接的・間接的働きかけや環境設定や見守りなど。

### 3) 子どもとの共有を図る

- 子どもが自分たちの活動を振り返り、整理し、とらえ直すことを助けるために記録を見られるようにする。
- 記録を保育者が子どもと共に作ることも可能にしていく。
- 子どもが見やすいように、写真とその言葉を分かりやすくする。
- 子どもが自分たちの活動を意味づけ、自覚していくことを助ける。
- 子どもがこれからの活動を選び、構想し、計画することを助ける。

## 4) 保護者との共有を図る

- わが子の元気な様子を知って、安心する。
- 保育の様子を日々具体的に分かり、信頼関係を築く。
- 遊びの中の学び、また長い目での育ちを分かっていく。
- 保育するとはどういうことかを具体的に感じ取るようになる。
- 保護者からの発信がしやすくなり、保護者と保育者との協働関係へと発展できる。

### 3. 記録・計画・連絡・管理をICTにより つなげて進める

- 写真を撮り、コメントを入れることがICTでつながって出来る。
- ドキュメンテーション（記録）を連絡帳、便り、児童票、その他に連動して生かす。
- 一人の記録をみんなの記録とする。
- 指導計画と連動して、日々改訂しやすくする。
- キーワードをいくつか選んで、資質・能力や10の姿などの視点を表すことも容易になる。
- 保護者とのやり取りを可能にする。
- 出欠管理その他の管理の仕組みを作っていく。